わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

(149)

簡単すぎる医療

最近立て続けに、医学に関して「新しい発見」と銘打ったニュースが目についた。

ひとつは、線虫という生物ががんの早期発見に使えるというもの。線虫とは、土や水の中に生息する体長1ミリの透明な虫で、これまでは実験動物として使われてきた。その線虫ががん患者の尿に反応することから、がんの早期発見の手段になり得る、との発表があったのだ。つまり、被検者の尿に線虫が集まれば、がんである可能性が大きいということになる。

線虫と尿―。この組み合わせは、何はさておき簡単である点がいい。どういうわけか、医学や医療は、簡単であることより難しいことのほうが高尚のようなイメージがある。とかく「医学は難解」との根強い思い込みが、弊害になることさえある。

しかし、今回は線虫である。そして尿である。血液のように針を刺す必要がなく、痛みもなく、普段当たり前のように排泄する尿を使うとは、患者にとってもこんな朗報はないだろう。

そして、もうひとつは「腸内細菌」だ。およそ100兆個に及ぶ腸内細菌が病気と深い関係があるという、驚くべき存在であることを示したのだ。

こちらも、NHKで取り上げられたために、大きな驚きと人々の関心を惹いた。

知人に、長年この分野の研究をしている人がいて、かねてから腸内細菌の凄さは聞いていたし、寄生虫博士といわれる藤田紘一郎氏の著書「脳はばか　腸はかしこい」を読んでも、腸内細菌の秘めたる力がうかがえる。しかし、今回の放送で驚いたのは、重い感染症に罹っている女性に施された「便微生物移植手術」というものだ。健康な人の便を水で薄め、それを患者の腸内に注入したところ、ウソのように症状が緩和される様子をしっかりと映し出していた。

他人の便をもらい、腸内細菌の分布図を塗り替えるという、極めて大胆な、しかしわかりやすい治療法は、実に衝撃的。さらに、がんや生活習慣病、そして性格までもが腸内細菌に左右されているという数々の実験結果は、ユニークで画期的な内容だった。

一方で、この種の、「夢のような検査や治療」に値するニュースには、注意が必要だと常々思っていた。医学とは人間を相手にする科学である限り、誰にでも適応できて完璧なものを求めること自体に無理がある。今回の2つの研究も、期待は大きいものの実用化にはまだ時間がかかるだろうし、研究を進めれば進めるほど壁にぶち当たる。結果的に「簡単」であっても、成功へのプロセスそのものは「複雑」で「難解」なはずだ。しかも、今後は「簡単」であることへの反発もあるだろう。残念ながら、医療はただ患者のためだけに存在するのではなく、すでに巨大で強固な一大産業でもある。

製薬会社が自社の新薬を売り出すために、大学を巻き込んでデータを改ざんしたニュースは記憶に新しいが、こんなことは氷山の一角、すべて私利私欲に目がくらんだ結果である。しかし、本来医療の原点はあくまで「患者のため」であるべき。

簡単で何が悪い。患者にとって簡単で苦痛のない検査や治療法が、結局は生き残る。遠まわりに見えても、常に原点を忘れずにいることが真の利益を生むのだと思う。

イラスト・伊藤栄章